



イラスト：永田信行

Contents

- 「調査成果の提供について」「環境DNA手引きの紹介」……………P1
- 「サンゴ礁分布調査について」「藻場調査の結果公表」……………P2
- 「タヌキ・キツネ・アナグマの全国分布調査について」
「ガンカモ類の生息調査について」……………P3
- モニタリングサイト1000 ニュースレター……………P4～P7
- 「鳥類繁殖分布調査の成果を公表」「鳥類標識調査実施中」……………P8
- 「いきものログのご紹介」「APBONについて」
「生きものなぞとき探偵団を開催」……………P9
- 標本紹介 第31回……………P10

表紙のイラスト

日本各地の生物多様性を1枚の絵巻にして表現した「つながりんぐ」から一部を抜粋しました。リュウキュウアカショウビンや、リュウキュウルリモントンボなど、南西諸島で見られる様々な生きものが描かれており、生きものたちのつながりが表現されています。絵巻の全体は生物多様性センターの展示室でご覧いただけます。

環境省 自然環境局



生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan



●調査成果に関する情報提供を行っています！

生物多様性センターでは、「自然環境保全基礎調査」や「モニタリングサイト1000」を中心に、国内の自然環境に関する多くの調査を実施し、基盤情報として整備しています。これらの調査成果は、単にデータを収集することが目的ではなく、地方自治体や研究者、保全団体、民間企業など様々な方に活用いただくことにより、さらなる価値を発揮します。このため、生物多様性センターでは、調査成果をWebサイトに随時掲載するとともに、各種調査結果の速報や報告書、記者発表などの最新情報をいち早くお届けできるよう、メールマガジンでの配信も実施しています。メールアドレスをご登録いただければ、最新情報をよりタイムリーに受け取ることができ、地方自治体における環境施策や調査の企画立案、博物館等での普及啓発などにおける基礎的なデータとしてご利用いただけます。

メールマガジンの配信は、本ニュースレターの電子版の配信も含め、年に4回程度の予定です。また、成果をよりご利用いただきやすくするため、生物多様性センターが実施する自然環境保全基礎調査やモニタリングサイト1000について、どのような調査項目がどの都道府県で実施される予定かを一括で検索できるExcelシートも配布しています。みなさまからのご登録をお待ちしています。

【メールアドレスの登録先】

●生物多様性センター biodic_webmaster@env.go.jp



自然環境調査Web-GISのトップページ
各調査結果のGISデータも公開しています

●環境DNA分析技術を用いた淡水魚類調査手法 手引き第2版公開！

生物多様性センターでは、これまで2020年6月に「環境DNA分析技術を用いた淡水魚類調査手法の手引き（第1版）」を公開しています。この度、調査等で得られた新しい知見等を追加し、さらに使いやすいものになるように改訂した「手引き第2版」を公開しました。手引き第2版では、環境DNA調査の流れをより分かりやすくし、環境DNA調査で問題となる「偽陰性」や「偽陽性」の解説、調査計画に役立つ情報（例 調査地点数、反復採水の効果）などを追加しています。

また、MiFish法（魚類環境DNAメタバーコーディング；水中に漂うDNAを使って網羅的に種を検出する手法）による解析結果のデータ精査のサポートとして、誤同定を防ぐツールである「MiFish法に係る誤同定チェックシート」の提供も開始していますので、役立てていただければ幸いです（チェックシートの利用には生物多様性センターへの申請が必要です）。

今年度は、この手引き第2版を活用し、大阪府立環境農林水産総合研究所生物多様性センターと共同で「大阪府内における環境DNA分析技術を用いた淡水魚類分布調査」も実施しています。大阪府内の約70ヶ所で採水を行い、現在の魚類の分布状況を把握するとともに、調査にあたっての課題を抽出し、さらに手引きにも反映していく予定です。

今後は、これまでに作成した手引きや確立した手法を、効率的な我が国の淡水魚類の生息情報の収集に役立てたいと考えています。



●環境DNA調査Webサイト

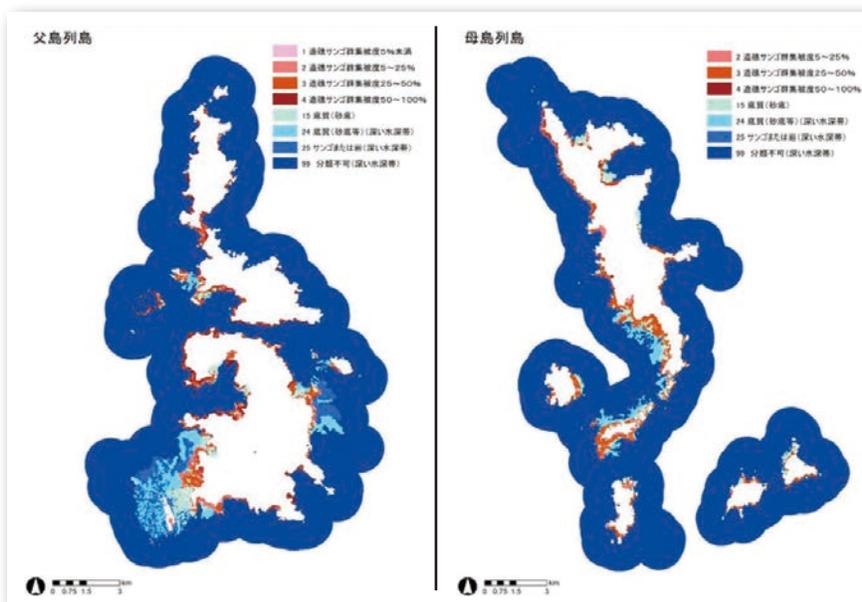
http://www.biodic.go.jp/edna/edna_top.html



●今年度で浅海域生態系現況把握調査（サンゴ礁分布調査）が完了します！

サンゴ礁は様々な生物が生息する重要な生態系の一つですが、気候変動の影響を受けやすく、海水温の上昇などによる白化現象も確認されています。

しかし、全国で面的にサンゴ礁の分布を把握する調査は近年実施されておらず、現状を反映した正確な評価や適応策の検討が行いにくい状況にありました。このため、2017年度からサンゴ礁分布調査に着手し、リモートセンシング技術を活用しながら、国内の主要なサンゴ礁の分布図を作成してきました。その調査が今年度で完了する見込みです。



サンゴ礁分布図の例
(小笠原諸島 左：父島列島、右：母島列島)

今年度は「5ヶ年のとりまとめ」として、過去の調査で得られたデータとの比較により、サンゴ礁の分布や面積の変化などについて整理した上、さらに環境要因との関連性などについても解析を実施します。

これらの結果は、気候変動対策等の各種施策、洋上風力発電等に係る影響評価、サンゴ礁生態系保全行動計画等への様々な面での活用が期待されます。2017～2020年度までの成果であるサンゴ礁分布図等につきましては、すでにWebサイトで公開しており、さらに来年度以降、2021年度の成果及び5ヶ年のとりまとめについても同サイトなどで公開していく予定としていますので、ぜひご活用ください。

●浅海域調査Webサイト

http://www.biodic.go.jp/kiso/44/44_kikou.html#mainText



●藻場調査のWebサイトを公開しました！

2021年8月31日に藻場調査（2018～2020）の結果をまとめたWebサイトを公開しました。このWebサイトでは、2018年から3年間で実施した藻場調査（2018～2020）の概要や、約20年ぶりに作成した藻場分布図の概要（藻場分布図の特徴や基本仕様、調達した衛星画像の仕様、藻場タイプなど）、調査成果のまとめ（藻場面積、全国、海区別の藻場分布の現状）、藻場分布図の作成方法（高解像度の衛星画像を活用した藻場分布図の作成方法、現地調査に活用した藻場分布図作成業務マニュアル）、全国59海域で実施した現地調査の結果（各海域の結果など）などを紹介しています。

今回作成した藻場分布図のGISデータ（Shapeファイル）は、自然環境調査Web-GISからダウンロードしてご利用いただけます。また、11月から自然環境調査Web-GIS上で藻場分布図が閲覧できるようになりました。

今後、藻場調査（2018～2020）の成果は、洋上風力発電所に係る環境影響評価や、藻場等の海生生物への適切な環境配慮、さらには、海での炭素吸収源（いわゆる「ブルーカーボン」）の算出根拠など、様々な面での活用が期待されます。ぜひ、藻場調査（2018～2020）のWebサイトをご覧ください！

●藻場調査Webサイト

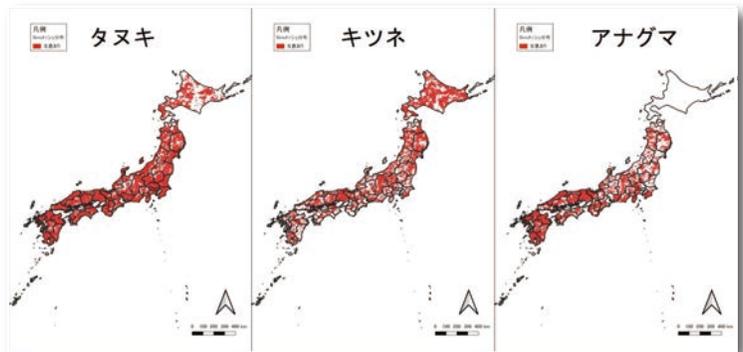
<http://www.biodic.go.jp/moba/>



●タヌキ・キツネ・アナグマの全国分布調査の結果を公開します！

タヌキ（エゾタヌキ、ホンドタヌキ）、キツネ（キタキツネ、ホンドキツネ）、アナグマ（ニホンアナグマ）の食肉目3種については、第6回自然環境保全基礎調査（環境省 2004）以来、全国的な調査が実施されていませんでした。そこで、生物多様性センターでは、基礎的な生息情報を得るため、2019年度より分布調査を進めてきました。2019年度には、秋田県・埼玉県・滋賀県・熊本県・鹿児島県の5県を対象とした試行調査を実施し、全国調査の調査設計を行いました。2020年度には全国調査として、狩猟等による捕獲情報（環境省捕獲情報収集システム）、文献調査、都道府県ヒアリング、市町村アンケートによる情報収集を実施しました。2021年度には補完調査として、2020年度の市町村アンケートにおいて回答が十分に得られなかった市町村に再度アンケートを行うとともに、鳥獣の捕獲が原則禁止となっている保護区（国指定鳥獣保護区等）を管轄している環境省地方環境事務所等へのアンケート、いきものログを用いた市民調査、日本哺乳類学会2021における自由集会を行いました。これらの調査結果の暫定版を示します。今後、データの精査や、有識者ヒアリング等を実施した上で、2022年中に公表する予定です。

最後になりましたが、お忙しいなかご協力いただきました地方自治体のご担当者の方々を始め、ご協力いただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

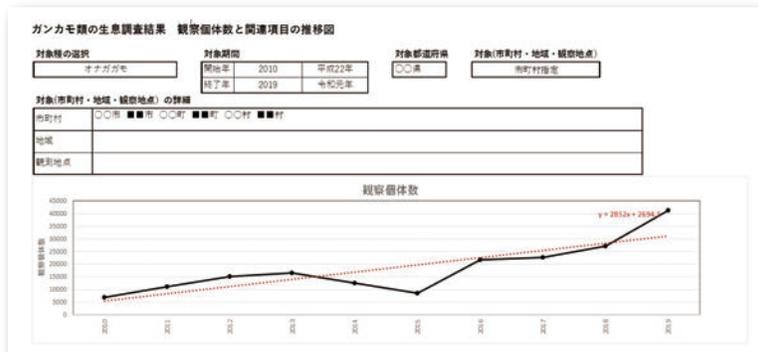


各種の生息情報が得られた地域（暫定版）

●ガンカモ類の生息調査データの解析用プログラムを作成中です！

ガンカモ類の生息調査（全国ガンカモ一斉調査）は、野生鳥獣保護管理行政（鳥獣の保護管理、希少種の保全、外来種・鳥インフルエンザ対策など）に必要な基礎情報として、ガンカモ類（ガン、カモ、ハクチョウ類）の冬期の生息状況を把握することを目的としています。本調査は、都道府県の協力を得て1970年から毎年1月に実施しており、2022年1月（2021年度）の調査で53回目となります。本調査のWebサイトでは、調査結果のほか、「ガンカモ類の生息調査の対象種識別ガイド」等も公開していますので、ぜひご覧ください。

また、生物多様性センターでは、これまでに蓄積された本調査のデータがより活用されやすくなることを目指し、観察個体数の推移を示した図や観察個体数一覧表が出力できる解析用プログラム（使用ソフト：Microsoft Excel）を作成中です。このプログラムは、それぞれ調査期間、調査対象種、調査範囲（都道府県／市町村／調査地点など）を選択することができ、使用者が知りたい情報を図示できるものとなっています。解析用プログラムは来年度中の公開を予定しています。これらを各種施策立案や調査・研究等に活用していただければ幸いです。



解析用プログラムを用いた観察個体数推移図の出力イメージ



オナガガモの群れとオオハクチョウ

●ガンカモ類の生息調査Webサイト

http://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html



1. 里 地

2023~2027年の調査にご協力いただけるサイトを募集します

公益財団法人 日本自然保護協会 福田 真由子

里地調査は、全国約240の調査サイトで、1,300人以上の市民調査員の方々にご協力いただき実施しています。里地調査は、100年継続して調査を行う重要地域「コアサイト」と、5年ごとに登録していただく「一般サイト」に分かれており、このうち一般サイトは来年2022年7月に次の5年（2023~2027年）の調査にご協力いただけるサイトを募集します。募集する調査項目は表の7項目で、このうち1項目以上を選んでご登録いただけます。世界的にも気候変動による自然環境への影響などが注目されていることから、現在も調査サイトが少ない東北や日本海側を中心に調査サイトを募集します。

モニタリング調査は長期調査が必要なこと、そして調査が地域を知る環境教育にもつながることから、大学や高校などが調査主体としてご応募いただくことも大歓迎です。来年から調査サイト募集に関する説明会をオンライン等で開催していきますので、調査に関心をお持ちの方がいましたらぜひお声かけをお願いします。

調査項目	調査手法	調査期間・頻度
植物	調査ルート上の植物の種名を記録	毎月1回
鳥類	調査ルート上の鳥類の種名・個体数を記録	繁殖期と越冬期に各6回
ほ乳類	自動撮影カメラにより種名・撮影頻度を記録	春から秋にカメラを設置
カヤネズミ	調査区内の巣の有無と環境条件を記録	初夏と秋の年2回
カエル類	アカガエル類の卵塊数と環境条件を記録	産卵期間中（冬）、2週に1回程度
チョウ類	調査ルート上のチョウ類の個体数と環境条件を記録	春から秋に月2回
ホタル類	成虫の個体数と環境条件を記録	発生ピークまで7~10日に1回

追加募集する調査項目とその内容



第4期サイト分布図（2021年9月現在）
東北・日本海側に調査地が少ない。

2. 陸水域 (湖沼・湿原)

霞ヶ浦で特定外来生物「チャネルキャットフィッシュ」を確認

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 金子 誠也

陸水域では、湖沼（淡水魚類・水生植物）と湿原の2つの生態系を対象に、2009年よりモニタリング調査を実施しています。このうち淡水魚類では、日本各地の11ヶ所のサイトにおいて5年に一度の頻度で調査を実施し、各種の個体数と湿重量を記録しています。2020年には、茨城県の霞ヶ浦（西浦、北浦、外浪逆浦等を含む水域の総称）に設置した西浦古渡サイトと北浦爪木サイトでチャネルキャットフィッシュが採集されました。

本種は北米原産のアメリカナズ科の淡水魚です。日本へは養殖目的で1971年に導入され、その後、各地へ分布を広げました。本種は、捕食や競争を通じて在来生物に大きな影響を与えており、外来生物法に基づいて特定外来生物に指定されています。特に霞ヶ浦では2000年代以降、個体数が増加し、地域の水産資源となる魚類等の食害、背ビレ・胸ビレの棘による漁業者の負傷や漁具の損傷等の被害をもたらしています。

西浦古渡サイトと北浦爪木サイトでは、前回調査（2015年）に引き続き捕獲され、湿重量では大きな割合を占めていました。現時点では他の調査サイトでの確認例はありませんが、今後もモニタリング調査を継続することで本種の動向を注視していく必要があります。



定置網を回収する様子（北浦爪木サイト）



北浦爪木サイトで採集されたチャネルキャットフィッシュ

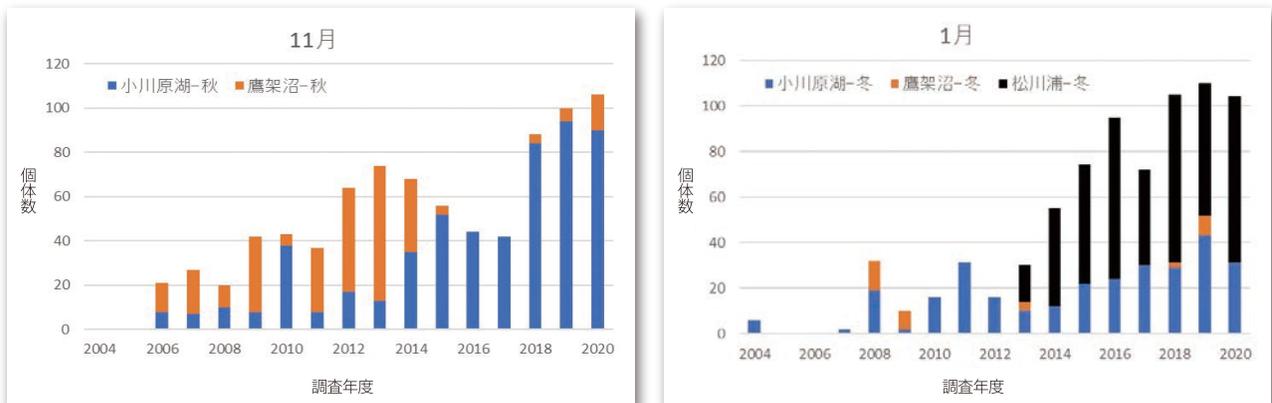


3. 陸水域 (ガンカモ類)

小川原湖のコブハクチョウ、越冬期は松川浦に渡っている？

NPO 法人 バードリサーチ 神山 和夫

コブハクチョウが10羽以上の群れで暮らしている場所の多くは、人が給餌している環境のようですが、モニタリングサイト1000で調査している小川原湖と鷹架沼（青森県）では自然の水草などを食べて生活しているようです。小川原湖や鷹架沼で繁殖しているコブハクチョウは11月調査に比べて1月調査の個体数が少ないため、越冬期は南に渡っているのではないかと推測したところ、1月の松川浦（福島県）と小川原湖・鷹架沼におけるコブハクチョウの総個体数が、11月の小川原湖・鷹架沼の総個体数とほぼ同じになることが分かりました。松川浦で越冬するコブハクチョウが増えてきたのは2010年代後半からなので、それ以前は別の場所に渡っていた群れが松川浦に定着するようになったのかもしれませんが。コブハクチョウは人が持ち込んだ外来種であることから、今後もモニタリングを通して注視していく必要があります。



小川原湖・鷹架沼と松川浦のコブハクチョウ個体数(左:11月、右:1月) 松川浦はガンカモ類の生息調査等の記録による。

4. 沿岸域 (シギ・チドリ類)

秋の渡りのシギ・チドリ類の種構成の変化

NPO 法人 バードリサーチ 守屋 年史

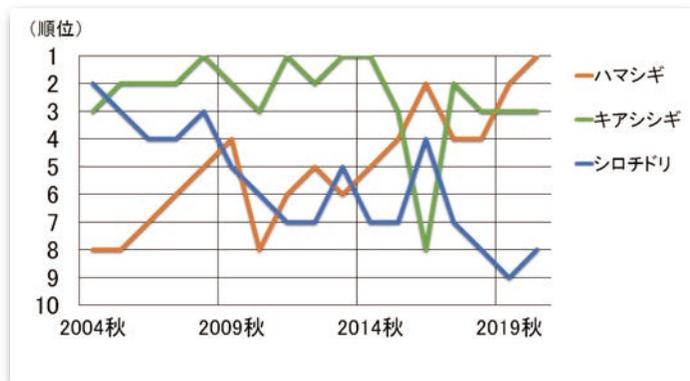
秋期の渡りのモニタリング調査の結果では、シギ・チドリ類全体の個体数は、近年、減少傾向にあります。モニタリング調査が開始された2004年から2020年の秋期までに記録された、年ごとのシギ・チドリ類の主要な個体数上位種の経年変化を図に示しました。

2014年ごろまではキアシシギが上位3位に必ず入っていましたが、近年はかなり個体数が少ない年があり、傾向が変化しつつあります。そのかわりに、ハマシギが徐々に上位に上がってきました。秋期の調査は9月末までであるため、10月頃から個体数が増える越冬種のハマシギは2004年時点では8位でした。他種が減少したため相対的に上がっているか、もしくは越冬地に向かう移動が早まっているのかもしれませんが。また、2004年に2位だったシロチドリが、2020年までに徐々に順位を落とし現在は8位となっていたり、種構成のランキングも変化しています。

秋期の渡りは、成鳥だけでなくその年に繁殖した幼鳥も越冬地に向け移動しているため、これらの傾向は、繁殖地での繁殖状況を示している可能性もあり注目しています。



ハマシギ (写真: 守屋 年史)



ハマシギ、キアシシギ、シロチドリの個体数ランキング変化 (2004年~2020年の秋期)

5. 沿岸域

(磯・干潟・アマモ場・藻場)

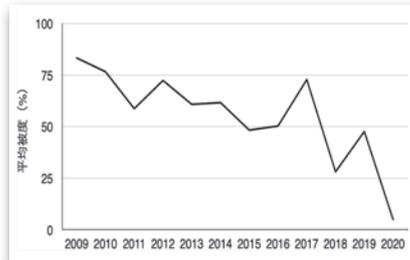
複数サイトで確認された植生の衰退および消失

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 青木 美鈴

沿岸域調査のうちアマモ場・藻場では、全国に各6ヶ所の調査サイトを設置し、植生の種類や被度を毎年記録しています。過去5年の間に、複数サイトでモニタリング対象としている植生の衰退および消失が確認されています。

藻場では、鹿児島県の薩摩長島サイトにて、2016年にアントクメ（コンブ目）の被度が激減し、その後、アントクメの生育は確認できていません。また、静岡県伊豆下田サイトでは、2020年にアラメ・カジメ（コンブ目）の被度が著しく減少し、海中林の縮小が懸念されています。

アマモ場では、鹿児島県の指宿サイトにて、2018年以降アマモが消失し、無植生の状態が続いています。また、沖縄県の石垣伊士名サイトでは、2020年にウミショウブの被度が著しく減少しました。これらの植生の衰退および消失は、複数の条件が影響しているものと考えられますが、複数サイトで藻食性魚類やウミガメによる藻体・草体の被食が確認されており、それらが植生衰退に影響を及ぼしている可能性が挙げられています。



藻場林冠部を構成する海藻類の平均被度の経年変化 (伊豆下田サイト：永久方形枠調査結果より)



側葉が消失して中央葉のみとなったカジメ：魚類による食害と考えられる (伊豆下田サイト) (写真：秋田 晋吾)

6. サンゴ礁

2016年大規模白化現象からの回復

一般財団法人 自然環境研究センター 木村 匡

サンゴ礁調査では、2016年の夏季高水温により宮古島から西表島までの先島諸島において、大規模な白化現象が観察され、場所によっては5割近くのサンゴ群集が死亡するという大きな被害を受けたことが分かりました。これは、気候変動による高水温によって引き起こされた地球規模のサンゴ礁の白化現象の一部で、オーストラリアやカリブ海など世界各地でも起こったものでした。それから4年経過した昨年の石西礁湖では、夏季高水温による白化現象が再び観察され、さらに被害を受けるかと心配されましたが、実際に調査してみると、高水温による被害が見られたのはごく一部だけでした。

多くの地点では、新たに加入してきたサンゴの小さな群体が多数観察され、2016年の高水温による被害から回復し始めたことが分かりました。

さて、今年の調査は10月頃から冬にかけて行いますので、結果が分かるのはもう少し先ですが、夏に石西礁湖を観察したところ、昨年見られた群体が大きく成長していましたので、今年はさらに回復し、往時の素晴らしいサンゴ礁景観に近づいていることが期待されます。



2016年の大規模白化現象により死亡したサンゴの群体上で成長する卓状ミドリシ類 石西礁湖北部サイトにて2021年7月撮影 (写真：上野 光弘)

7. 小島嶼 (海鳥)

ドブネズミ駆除から約10年ぶりに確認されたヒメクロウミツバメの雛

公益財団法人 山階鳥類研究所 富田 直樹

福岡県小島は直径200m程の小さな島で、カンムリウミスズメやヒメクロウミツバメ（ともに絶滅危惧Ⅱ類[VU]）といった希少な海鳥が岩の隙間や地面に穴を掘って子育てを行います。この島には、1987年と2009年の2回ドブネズミが侵入し、両種が大量に捕食され、巣の数は大幅に減少しました。ドブネズミは殺鼠剤の散布によって駆除されましたが、現在もカンムリウミスズメは10巣程度、ヒメクロウミツバメは成鳥が飛来するものの、卵や雛の確認はなく巣穴数も減少していました。

しかし、2020年8月の本調査で、ヒメクロウミツバメの巣穴2ヶ所で雛が1羽ずつ確認されました。実に11年ぶりのことで、今後の繁殖数増加が期待されます。

海鳥の多くは、1回の繁殖で1～数個程度の卵しか産むことができず、天敵である外来種を除去できたとしても個体数の回復には長い時間を必要とします。今後も本調査は、海鳥への脅威の監視だけでなく、外来種対策の効果を検証する上で重要な役割を果たしていきます。



小島で11年ぶりに確認されたヒメクロウミツバメの雛 (写真：岡部 海都)



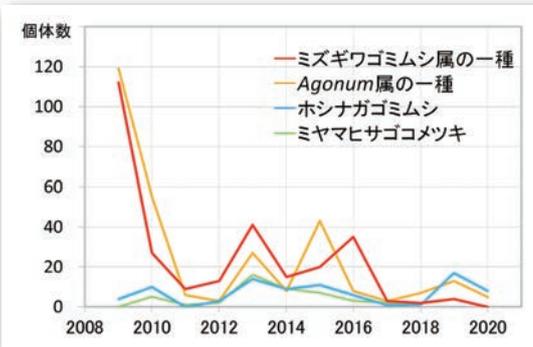
8. 高山帯

地表徘徊性甲虫類の種構成に変化の兆し

一般財団法人 自然環境研究センター 丹羽 慈

高山帯調査の白山サイトでは、全国5ヶ所のサイトの中で唯一、地表徘徊性甲虫類のモニタリング調査が行われています。調査は、積雪が多く潤湿な雪田植生群落（2ヶ所）、常に強風にさらされる風衝荒原群落、ハイマツ林の計4ヶ所で行われ、植生ごとに特徴的な種構成が見られることが分かりました。さらに、開始から11年が経ち、一部の地点では種構成に変化の兆しが現れ始めているようです。

特に、調査地のうちで最も標高の低い南竜ヶ馬場の雪田植生群落では、優占種で潤湿な環境を好むミズギワゴミムシ属の一種が近年あまり捕れなくなり、最近2年間はホシナガゴミムシが第一優占種となっています。また昨年度は、本来はより低標高の森林に生息するクロナガオサムシが、この地点で初めて記録されました。地中の温度の観測結果からは、近年積雪の開始が遅れ、かつ雪解けの時期が早まっていることが分かっており、少雪化・乾燥化が進んで甲虫類に影響が現れ始めたという可能性も考えられます。

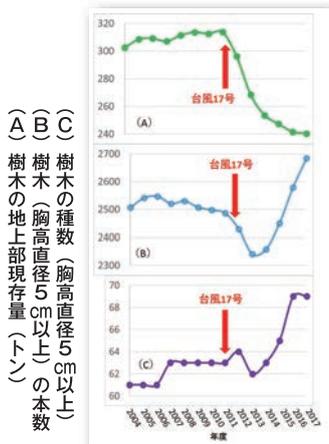


白山サイトの南竜ヶ馬場雪田植生群落における、地表徘徊性甲虫類の主な種の捕獲個体数の年変動

9. 森林・草原

長期的な森林調査データからその変化をわかりやすく示す

一般財団法人 自然環境研究センター



2005年度から、全国の森林で樹木の種数、成長量、生死を調査しています。樹木の寿命は大変長いため、森林の変化を知るためにはこうした地道な調査を長期にわたって継続して行う必要があります。その調査結果から、森林に起こっている変化を捉え、発信していくためには、継続して集められた大量のデータを集計・解析して、わかりやすく示していく必要があります。調査が長期にわたるほど、蓄積されたデータが大量になり、きちんと整理して管理し、集計・解析する作業が大変になります。

このような課題はモニタリングサイト1000以外の長期観測調査でも課題となっており、データ集計とグラフ化を自動化するアプリケーションが開発されつつあります。森林・草原分野では、本事業にも関わった甲山哲生氏（現東京大学）が作成したMoniSenForest (<https://github.com/kohyamam/monisenforest-docker>) などがあります。

このようなアプリケーションも活用しながら、我が国の森林で起こっている変化や現状を、わかりやすくみなさまにお伝えしていきたいと思えます。与那サイト（沖縄県）における台風かく乱（2012年）前後に注目したグラフの例を図に示します。この3つのグラフから、みなさんは台風後のどのような変化を想像しますか？

10. 森林・草原 (陸生鳥類)

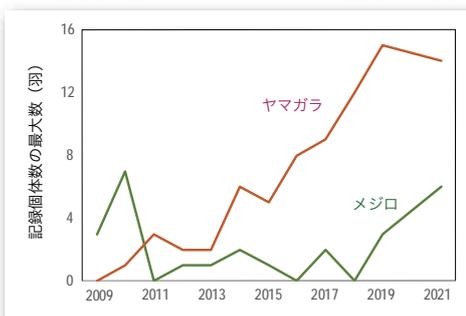
照葉樹林に生息する鳥が高標高の場所で増加

NPO 法人 バードリサーチ 植田 睦之

環境省とNGOが協働で実施し、今年終了した鳥の分布の全国調査「全国鳥類繁殖分布調査」では、照葉樹林帯に多いメジロやヤマガラなどがこれまで生息地としていた低山帯から、標高1,000m程度の場所へと分布を拡げていることがわかってきました。原因はわかりませんが、気候変動等の影響で生息標高が徐々に上がっている可能性があります。

そこで、標高1,000mに位置する、本調査の調査サイトである新潟県佐渡でのメジロとヤマガラの個体数変化を集計したところ、近年個体数が増えていることがわかりました（図）。分布が広がっているだけでなく、個体数も増加している可能性があります。同様の標高に位置する調査地、秩父演習林でもメジロが顕著に増加しており、ヤマガラもやや増加していました。

今後の変動や、さらに標高の高い調査地でも同様のことが起きるかに注目して、モニタリングを続けていきたいと思えます。



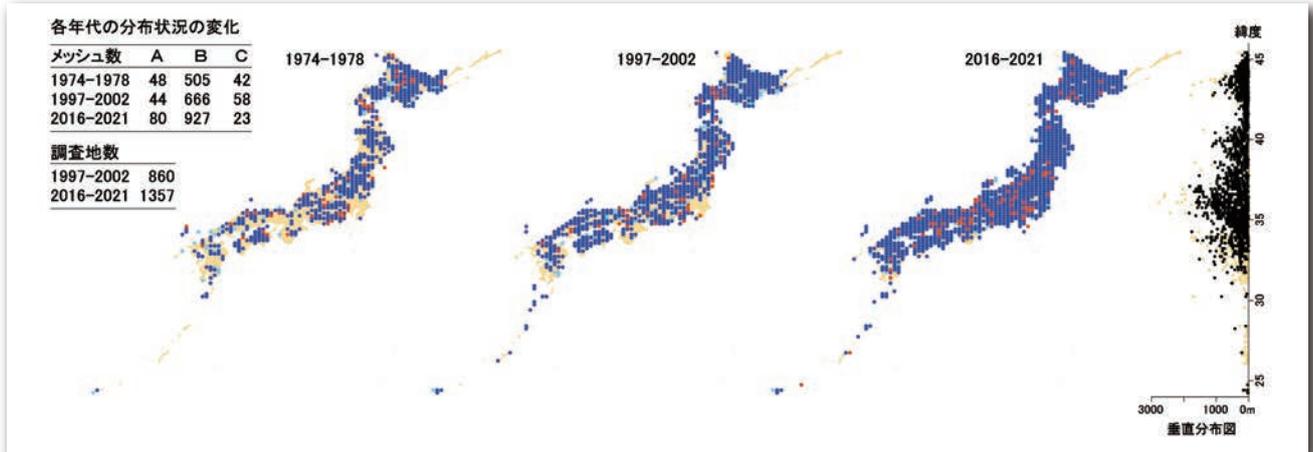
大佐渡調査地におけるヤマガラとメジロの記録個体数の変化
2020年は調査を実施していない。（写真：三木 敏史）



●「全国鳥類繁殖分布調査」の6年間（2016～2021年）の調査成果を公表しました！

本調査は1970年代、1990年代に続き3回目となります。約20年ぶりとなる今回の調査では、新たな試みとして市民等のボランティア参加による現地調査等に基づき、NPO等と協働で結果をとりまとめました。過去2回の調査と今回の調査結果を比較することで、樹林性の鳥の分布拡大、農地などの開けた場所を利用する鳥の個体数減少など、さまざまな変化が明らかになりました。例えば、樹林性の種であるキビタキは、分布が大幅に拡大していました。

調査結果をまとめた報告書は、「全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年」（鳥類繁殖分布調査会2021）にまとめられており、全国鳥類繁殖分布調査Webサイトで閲覧・ダウンロードできます。調査データについては、生物多様性センターWebサイト「いきものログ」で閲覧・ダウンロードすることができますので、ぜひご活用ください。



キビタキの分布図

[報告書のダウンロードはこちら]

●全国鳥類繁殖分布調査Webサイト

<http://www.bird-atlas.jp/>



[調査データのダウンロードはこちら]

●いきものログWebサイト

https://ikilog.biodic.go.jp/GroupInfo?group_id=1



●鳥類標識調査を実施しています！

鳥類標識調査は、野生の鳥に個体識別のための足環などを装着して放鳥し、再捕獲や観察によって情報を収集、解析することによって、鳥類の渡りの実態やさまざまな生態を明らかにし、鳥類の保全施策やそのための国際協力の推進に役立てる調査です。標識放鳥された鳥の数は2020年に620万羽を超え、調査を通じてさまざまなことが明らかになっています。

鳥類標識調査で得られた成果を分かりやすくお知らせするため、2020年からニュースレター「バンディングかわら版」を発行し、ツバメの渡来と繁殖時期が昔より早くなっていることなど、標識調査でどんなことが分かったかを紹介しています。ニュースレターはWebサイトに掲載しています。また2021年には、標識調査結果の活用事例の一部を紹介する調査成果の活用のページを新たに作成しました。そのほか、回収データについて、国内・海外での渡り経路、年齢等を解析するとともに、GISデータを公開しています。



標識を装着しているようす

●鳥類標識調査Webサイト

<http://www.biodic.go.jp/banding/index.html>



●「いきものログ」では種名調べをサポートします！

生物多様性センターでは、日本全国の生物情報を収集し提供するインターネット上のシステムとして、「いきものログ」を運営しています。いきものログは、見つけた生きものの写真や記録情報などを登録し、自分だけの「生きものデータベース」として使うことができます。また、「生きものの写真を撮ったけれど、名前が分からない」というビギナーの方のために、専門家に質問ができるサービスである「種名調べ支援」を毎年期間限定で実施しています。2021年の種名調べ支援はすでに終了しましたが、大変ご好評をいただき、400件を超える質問がありました。2022年の実施については、いきものログWebサイトをご確認ください。

●種名調べ支援

写真と撮った場所の環境などを投稿すると、専門家から種名、または種名を特定するためのヒントをお答えします（1ユーザあたり20回まで）。2021年は4月から9月まで実施しました。

<https://ikilog.biodic.go.jp/IdentifyRequest/>

●いきものログ

Webサイト <https://ikilog.biodic.go.jp/>

問い合わせ先 TEL: 0555-72-8018



いきものログ



●国際的な生物多様性情報の共有を図っています！

APBONは、地球観測に関する政府間会合（GEO）の「生物多様性観測ネットワーク」（GEO BON）のアジア太平洋地域における地域活動として、2009年に発足しました。生物多様性センターは、得られた情報を共有化し、生物多様性保全に関する政策決定に役立てることを目指し、事務局を務めています。

毎年、生物多様性観測に係る国際会合（近年はWebセミナー）等を開催し、最新の知見・情報の収集、意見交換を行い、GEO BON等との連携を通じ、国際的な情報の共有を図っています。

英語版になりますが、以下Webサイトにて、活動状況を紹介していますので、ぜひご覧ください。Webセミナー等の資料もご覧いただけます。なお、日本語版についても順次更新中です。

●APBON Webサイト

<http://www.esabii.biodic.go.jp/ap-bon/aboutus/index.html>



●『生きものなぞとき探偵団』を開催しました！

生物多様性センターでは、身近な自然環境に興味・関心を持っていただくことを目的とし、定期的に自然体験プログラムを開催しています。今年は、『生きものなぞとき探偵団』をテーマに、クイズやゲームにチャレンジしながら、身近な生きものの不思議・ユニークな暮らし・つながりを解き明かしてみました！生物多様性センターの周辺で捕まえられる昆虫のビンゴゲーム『初夏の小さな生きもの編』、散策路を探検しながら生物多様性に関するクイズを解き明かす『夏の森でなぞとき編』、指令カードに書かれた秋の訪れを探す『秋の探しもの編』。参加者のみなさまは、身近な自然の生物多様性をたっぷり堪能していました。

他にも、『あなたの知らない!?ミミズの世界によろこそ！』と題してミミズに関する10のクイズも実施しました。人の生活にも関わっているミミズから、足元の自然環境を見直すきっかけが生まれていたらうれしいです！



自然体験プログラム風景

生物多様性センターに収蔵している標本紹介 第31回

生物多様性センターでは、『日本の生物多様性を後世に伝える』『日本の自然的重要な地域の生物相を顕す』『生物多様性の理解を深める』という3つの観点から、日本全国に分布している様々な生物の標本を収集しており、現在は65,000点以上の標本が収蔵されています。これらの標本は普段は非公開としていますが、このコーナーで収蔵標本の一部をご紹介します。



ミサゴ 本剥製 (生物多様性センター蔵)

和名：ミサゴ

学名：*Pandion haliaetus haliaetus*

分布：世界的に分布の広い亜種であり、寒冷地に生息するものは南へ渡り越冬する。日本では、海岸近くの岩場や大きな河川、湖沼の近くで繁殖する。

分類：タカ目 ミサゴ科※

※日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会 2012）において、タカ科からミサゴ科に変更されました。

環境省レッドリストカテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

水辺に特化したからだ

ミサゴは、全国の海辺や湖・河川の近くに生息しています。猛禽類（タカ目、ハヤブサ目、フクロウ目のなかま）は、主に哺乳類の肉を食べる種が多いのですが、ミサゴはその中でも珍しく、主に魚類を食べます。

ミサゴの羽毛は水をはじきやすく、全身が水中に沈むほど、深く飛び込む事もあります。また、足裏には小さな突起状の皮膚があることに加え、一番外側の足指（第4指）は反転できるほど可動域が広く、滑りやすい魚をしっかりとつかむことができます。このように、水辺での生活に特化したからだのつくりをしているのが、ミサゴの特徴のひとつです。



水に飛び込むミサゴ

いろいろな名前 - ミサゴ・水探・魚鷹 -

ミサゴの名前の由来は、水中を探って魚を捕ることを示す「水探（みさご）」と言われていました。奈良時代から「みさご」と呼ばれていたようで、ほかには「覺賀鳥（かくかのとり）」という名前でも古くから知られていたようです。

鎌倉時代以後は「みさご」という名前が主に用いられてきましたが、伊豆・駿河における方言では「びさご」、近江地方の方言では「むしゃご」とも呼んでいたそうです。また、魚を捕まえて食べることから「魚鷹（うおたか）」の異名も持っています。現在では準絶滅危惧種として掲載されてしまっているミサゴですが、方言も含めたいろいろな名前と呼ばれるほど、昔は身近に見られる猛禽類だったのかもしれない。

飛び方と見た目

ミサゴは身体大きさに比べ翼が長い鳥です。細長く、先の尖った形状をしている翼は、長時間の帆翔（はんしょう：上昇気流を利用して、翼を広げたままはばたかずに飛ぶこと）や、高速度で開けた地域を飛ぶことに適しており、広範囲の海や河川などで餌の探索や、長距離の移動をする時に有利になります。

「飛び方」繋がりのお豆知識ですが、ミサゴは餌を持ちながら飛ぶとき、まるで、手ぬぐいを絞っているような（身体と餌の魚が平行になるような）持ち方をして餌を運ぶことがあります。これは、あまり見られない独特な行動ですので、みなさんも飛んでいるミサゴをみかけた時は、ぜひチェックしてみてください！

- 参考文献 1998.森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男.図鑑日本のワシタカ類.(株)文一総合出版. P10-P21.
2005.菅原浩・柿澤亮三著編.図説鳥名の由来辞典. 柏書房. P92,P366,P433.
2008.安部直哉・叶内拓哉.山溪名前図鑑野鳥の名前. 株式会社山と溪谷社. P304.
2009.フランクBギル著・山岸哲(日本版監修)・山階鳥類研究所訳.鳥類学(原書第3版). 株式会社新樹社. P147.
2014.環境省. 2014. 環境省レッドデータブック2014 2鳥類. 株式会社ぎょうせい. P225.

新任職員紹介

専門調査官 根上

4月から専門調査官として、植生図、鳥類標識調査、国際業務等を担当しています。これまでの業務と異なる部分も多く、いまだに追いついていないですが、早く役に立てるように経験を積んでいきたいと思えます。

調査科長 鴛海

地方環境事務所での任期付職員を経て、4月から調査科に配属され、環境DNAや植生図、浅海域業務等を担当しています。これまでの調査や研究等の経験も生かし、みなさまのお役に立てるように頑張りたいと思えます。

調査科員 内山

新規採用職員として4月より調査科に配属になりました。モニタリングサイト1000海鳥調査とシギ・チドリ類調査、全国鳥類繁殖分布調査などを担当しています。先輩方からいろいろと学びながら頑張っていきますので、よろしくをお願いします！

情報システム科長 秋月

4月より情報システム科に配属され、日々、システムやデータ関係の横文字・英略字に翻弄されています。これまでの国立公園のレンジャー経験を生かして、自然とシステムのインタープリターになれるよう、頑張ります！



● 展示室 つながりうむ

生物多様性センター内に設けた展示室（つながりうむ）では、各種調査で収集・集約した情報や剥製などの資料を一般に公開し、生物多様性の保全に資する普及啓発を推進しています。

前回の改修から約10年が経過し、最新の情報を提供できなくなっていることから、これを機に我が国の生物多様性の保全に資する普及啓発をより積極的に推進することを目的として展示の一部改修を進めており、今年度中にリニューアルが完了する予定です。



生物多様性センター 展示室（つながりうむ）入口

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 冬季期間（12月～4月下旬）の土日祝日
年末年始（12月29日～1月3日）
- 入館料 無料
※団体でご利用される場合は事前に連絡をお願いします。

※新型コロナウイルス感染症対策として、一部施設・設備の利用を制限することがあります。

交通案内

- 富士急行線・中央高速バスで河口湖駅または富士急ハイランド駅下車、タクシーで約10分
- 中央自動車道路・河口湖ICまたは東富士五湖道路・富士吉田ICより車で約10分



環境省 自然環境局

生物多様性センター Biodiversity Center of Japan

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1

WebサイトURL <http://www.biodic.go.jp/>

TEL : 0555-72-6031 (代表) E-mail biodic_webmaster@env.go.jp



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。